

1. 提案のコンセプト

(1) 資産名称・概要

<名称> 三徳山

<概要>

三徳山は、洞窟や奇岩、絶壁、溪谷などの奇勝と、希少な動植物の生息、自生と相まって名勝地を構成するとともに、国宝三仏寺奥院（投入堂）で代表される修験の地として、昭和9年に「名勝及び史跡」に指定されている。

この三徳山は、役行者が投げた蓮花が落ちた地として、706年に絶壁に神窟を開いたと伝わり、849年に慈覚大師円仁が釈迦・弥陀・大日の三仏を安置し「浄土院美徳山三仏寺」と号したという。この地に天台密教が伝播した9世紀以降、山上に多くの神々が合祀されていく。そして谷を挟んだ対岸には、多数の寺坊等が営まれ繁栄したことが今に残る「千軒原」の地名から窺うことができる。

伯耆の地には、時を同じく天台寺院として栄えた大山寺がある。三徳山と大山寺は、それぞれこの地方の豪族と深い信仰で結ばれ、経済的、軍事的勢力を保持していた。三徳山は、政治抗争や社会変動に巻き込まれ、大山寺とも繰り返して争っていたことが「大山寺縁起」に記されている。12世紀末の源平争乱以降の不安定な社会情勢の中で、衰退と再興を繰り返しながら、16世紀後半にほぼ現在の社閥を形成するに至る。そして17世紀の幕藩体制のもと、三徳山に対して鳥取藩により寺領が安堵され、法会に奉仕することなど、領内の限定的な支配権が与えられた。

また、明治新政府の神仏分離政策による急激な廃仏毀釈の動きの中で、各地の寺院では多くの貴重な建造物や仏像が破却され急速に衰退したのに対し、三徳山では山上の社閥が寺の所管でありながら、権現を祀る鳥取藩の「宮所」として扱われてきたため、破却から免れ往時の姿を留めることとなった。

三徳山の歴史は、衰退と再興の繰り返しである。しかし三徳山は決して廃れることなく1,300年の時を経てなお、今にその姿を留めている。これは三徳山が政治・経済の中心地から離れた深山幽谷の地であることに加え、その基盤をなす安山岩と凝灰岩によって産み出された岩窟や奇岩などの浸食地形と、その地形に適応したカシやブナに代表される原生林からなる豊かな植生とが織りなす自然景観が、目に見えぬ神仏の姿を現すものとして古来より人びとを惹き付けてやまなかったことによるものである。

そして、資産範囲のほぼ中央を東西に流れる三徳川左岸の山上からその麓にかけて、来世の空間と来世と俗世をつなぐ空間があり、右岸には俗世の空間が存在したと考えられる。自然と一体化し、浄土に至る求道の過程を表現した行者道とそこに点在する建造物は、訪れる者に来世への憧れを抱かせる。中でも修験道の本尊である蔵王権現が祀られた三仏寺奥院（投入堂）は、人間が容易に近づくことを許さない、断崖に臨む岩窟という限られた空間にある。崖下から仰ぎ拝する投入堂の姿は、自然と融合した美の極限を目指したものであり、来世への憧れの象徴である。そして、そこから見る景観は、まさに浄土から見下ろす下界の景観に他ならない。背後や周辺に広がる今も昔と変わらない自然の中に、本地垂迹の思想が凝縮されたこの景観は、一幅の山水画ともなっており、中国大陸に見られる仏教の聖地とのつながりを窺わせる。

我が国特有の本地垂迹の神仏混合を具現化した修験の聖地は列島各地に見られるが、その中で三徳山は、時代を越え変動する社会情勢に翻弄され衰退と再興を繰り返しながらも、その本質を変容することなく千年以上の時を越え変わらぬ姿を留めている。聖なる三徳山は、深山幽谷の中に自然と信仰の一体化した姿を求めた人間の英知が創り上げ、そして今日まで守り続けられている世界的に顕著な普遍的価値を有する文化的景観である。

(2) 写真

大分県の大分市「
妻野・岩谷遺跡(1)



資産全体を三徳川下流(西側)から望む



国宝三仏寺奥院(投入堂)



重要文化財地蔵堂(右上)と重要文化財文殊堂(左下)

(3) 図面 (資産の位置・範囲)

三浦山園地



